

Z世代のための漱石「ことはじめ」(上)

——「木庭先生の庭」散策・番外篇——

児 玉 寛

【順路の変更①：漱石の方針転換、あるいは、職業作家への転進以前】からの抜粋—— 1) 本稿の副題にいう「散策」を連載中のところ、さきに漱石の『それから』についての論考を世に問うた木庭先生の新たな漱石「論」に接した¹。そこで、Z世代にも漱石に親しんでいただくきっかけにと、散

1 本誌分載の「『木庭先生の庭』散策」の(1)[55巻3号]、(2)[55巻4号]、(3)[56巻4号]を、①-、②-、③-として引用する。また、三回分載予定の本稿[57巻2号～4号]を上、中、下として参照指示する。木庭 顕「夏目漱石『それから』が投げかけ続ける問題」(初出・2011。大幅改定の同『憲法9条へのカタバシス』みすず書房・2018・85-127)。

筆者は児玉を、WRは旧ブログ「木庭先生の庭」の作成者(White Rabbit)を、著者は木庭 顕を指す。明朝体は筆者による記述を、教科書体はWRからの抜粋を、明朝斜体字は著者からの引用(引用文中の／は原文では改行)を指す[参照：①-284註1]。③-561の木庭氏のコメントにいうように、エリア⑤で社会構造の例解に用いた「鳥占い」や「神殿参拝」のパラダイクマは儀礼に関わる。「神話と儀礼」並びにその前提となる「クリティックの諸相」を対象とするエリア⑥以下の原稿はWRから届いていたが、紙幅の制約から分載(4)に先送りした。ところが、木庭顕『ポスト戦後日本の知的状況』(講談社。以下、同14にいう略称に依りPPW: post-postwar)が、③公表の2024年3月に刊行された。カバー裏表紙のキャプションに曰く、「前著『クリティック再建のために』(講談社選書メチエ)で提示された図式を日本にあてはめたと、どんな歴史が見えてくるのか? 戦前期から戦後期、そして『ポスト戦後期』に区分し、この国が何に失敗したのか、その原因は何だったのかを鋭利な刃を手にして冷静に、しかし容赦なくたどっていく」。また、PPW26以下に曰く、「漱石は初期の作品から一貫して知的階層の問題を扱う。その離陸を阻む社会構造を常に視野に入っていた。そして一九〇八〔明治41〕年の『三四郎』において初めて本格的に、

策の順路を変更し番外篇として、漱石のエピソードの紹介を僭越ながら買って出た次第。本稿は、汗牛充棟の「漱石論」や精緻さを競う「漱石学」を前にして佇むばかりの素人による甚だ繁閑よろしきを得ないパッチワーク（「脚註飛ばし読み」も可）²。パーツの選択と組み合わせの指針は、漱石の数度の方針転換と転職（あるいは転出）願望と経済生活（おカネの問題）。慶応3年（1867）に生まれて大正5年（1916）に逝った漱石の満年齢は、1868年を元年とする明治の年代と重なる。本稿の年代表記は、漱石存命中は元号、その前後は原則として西暦。（平均寿命が45歳前後だった頃）漱石の49年間の生涯は40年4月の職業作家への転進を挟んで二分できる³。㊦と㊧では転進前と後の軌跡を辿り、㊨では方針転換や転職（ある

市民社会の成否の問題を、経済社会としての側面を強く意識しつつ、介在させて、社会構造を分析する、ということに転ずる。その際彼は、市民社会の成立を阻む（自己に内在する部分を含む）条件と格闘する主人公の傍らに、しばしば、この阻害のダイナミズムから弾き出されるようにして生まれる分子を置く。そうした類型の最初の人物が『三四郎』の中の登場人物、「与次郎」、である。／おそるべきことに、この与次郎は、その後の日本の表見的知的階層の全ての特徴を先取りしている」。

WRには＜PWで足踏みしないように＞という木庭氏の意向を伝えていたにもかかわらず、その職歴〔⇒㊦-285註3〕にスイッチが入ったらしく、早くもGWに明けに「順路の変更」の第一稿が届いた。およそ小説とは馴染みの薄い筆者にも、伝記的事実と小説のテキストとの関係づけのほか、「談話」というインタビュー記事や「追想」という主観的な「証言」の援用が気にはなった。しかし、WRの労に報いるべく、全体を三回分に縮めるようWRに求め、例年になく遅い梅雨入りの日（6月21日）に届いた㊦と㊧のテニオハに手を入れ数個の補注を加えた。両編は木庭氏の漱石「論」と直接的には関わらないようなので、氏のコメントは㊨の成稿を得てから仰ぐことにして、コメントなしで先に公表する。2020.6.25〔校了は7.25〕

- 日本史に関する事項については主として『日本史大事典』（平凡社・全7巻・1992～94）に、また、経歴・建造物・施設などについては主としてGoogleの検索に拠る。
- コンパクトで工夫を凝らした東北大学附属図書館のサイト「夏目漱石ライブラリ」のほか、江藤淳（1932-99）による『決定版 夏目漱石』（初出・1974。新潮文庫・1979）の「夏目漱石小伝」241～274、並びに、巻末の「夏目漱石年譜」561～569を参照。より詳しくは、江藤の自死によって未完に終わった大作（全

いは転出) 願望の背後にあったものを探り転進後の職業作家としての「構え」を一瞥する。「おカネの問題」⁴への視角は、上と中での「個人におけ

1914頁)『夏目漱石とその時代』(新潮社。第一部・1970、第二部・1970、第三部・1993、第四部・1996、第五部・1999。以下、『漱石(第〇部)』を参照。

- 4 前註3の江藤は、約四半世紀ぶりに『漱石(第三部)』を刊行した1993年の講演で曰く、「文学者を論じる時に、やはり経済生活というのは非常に重要なものだと思っています。この作家の経済生活はどんなものだったのか、所得税を払っていたかどうかなどは、きわめて大事な点である」(同『為替と念書——『漱石とその時代』余話』(初出は「夏目漱石没後百年／生誕百五十年記念講演」と銘打った新潮社『波』2016年12月号か。引用は電子版)。山本芳明『カネと文学 日本近代文学の経済史』新潮選書・2013、同『漱石の家計簿 お金で読み解く生活と作品』教育評論社・2018(以下、山本『家計簿』)がある。

ちなみに、所得税の導入は20年〔参照：大蔵省主税局編『所得税百年史』大蔵省主税局・1988〕。戦費調達を図るために給与所得への源泉徴収が導入されるのは1940年、また、税理士制度の導入は1942年。それらがなかった時代、税務監察局(現・国税庁)が税務相談に応じた。軍備増強は、日清戦争の前年26年からの「製艦費」のような「支援金」名目での天引き(⇒後註59)或いは増税につながる。37年からの日露戦争は、増税による相談の激増と「国税従事者」など偽の肩書きで高額の相談料を貪る者をもたらす。ちなみに、『それから』三の七(後註11にいう文庫版の頁で48)、十二の七(195)にいう「多額納税者」を参照。

官吏(⇒後註31)生活を辞めて40年4月に東京朝日新聞社に入社した漱石は、同期入社で旧知の渋川玄治(M5-1926。陸軍勤務の熊本時代に漱石主宰の句会に参加。⇒寺田寅彦)宛5月28日付けに曰く、「社員諸君は所得税に対して如何なる態度を取られますか。社の方では一々税務署の方へ生等^{〔せいり〕}の所得高を通知されますか。又は税務署の方から照会又は検査に参りますか。所得の申告をしろと催促状が来しましたから一寸参考にと伺いたいと思ひます。……お役人をやめられてから始めての所得申告と云ふ点が小生と一寸似て居ますから是も参考に一寸聴かして下さいませんか」(後註11にいう表記で巻23-54)。翌29日付けに曰く、「ズルク構えて可成少ない税を払う目算を以て伺つた訳であります。実は今日迄教師として充分正直に所得税を払つたから当分所得税の休養を仕るか左もなくばあまり繁劇なる払ひ方を遠慮する積りでありました。然る所公明正大に些々た〔る〕所得税の如き云々と一喝された為めに蒼くなつて急に貴意に従つて真直に届け出る氣に相成りました」(同・58。⇒後註19)。山本『家計簿』58以下に、35年からT4年までの漱石・鷗外・逍遙・露伴・荷風らの所得税額の推移の表がある。

る収支」から㊦では「社会における位相」へと転じる⁵。なお、漱石ゆかりの人物のうち下線を付した方の略歴は㊦の註51に一括して掲出する。また、明治期の常用^{しょうばい くろうと}（商買、黒人のような）当て字が混在する漱石の用字について、引用文での「ひらがなルビ」は底本（適宜取捨）、「カタカナルビ」は引用者。

三つの前置き。第一に、明治という時代について。漱石の孫娘によれば、「日本文学を専攻しているアメリカの青年が、／『明治時代の日本の小説、特に漱石の小説には矛盾があるね』／と言ったことがある。どの作品にも銭湯と下女が登場する。しかしどうして銭湯を利用する登場人物達に下女が雇えるのか？……というのが彼の突く作品上の“矛盾”であった」⁶。千

5 前註1・木庭・『『それから』』99注25に曰く、『『お金の話』はMolièreやBalzacを引くまでもなく市民社会の基礎に関わる。『市民社会と言っても現実のお金が無ければ』とか、『所詮ブルジョワの強欲社会でしょ』という話でもなく、（前註4にいう）漱石が私生活において他の作家に比べてお金に執着したかどうかという話でもなく、逆に、社会の人間のあり方の質がお金によって表現できるのである。白い百合でも愛を表しうるように。したがって、この作品〔『それから』〕は経済をあつかったものである、というのは逆の誤りである」。なお、三谷太一郎『ウォール・ストリートと極東 政治における国際金融資本』（東京大学出版会・2009・39）に曰く、「夏目漱石は、一九〇九年（明治四二年）に『東京朝日新聞』に連載した小説『それから』において、外債依存の固定化と拡大に対する危機感・不安感を主人公長井代助のこぼれとして、次のようにかいている。『日本程借金を拵へて、貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君、何時になったら返せると思ふか』（以下略）」。詳しくは、『それから』六の六（91）ならびに㊦に譲る。

6 長女筆子（⇒後註22）の四女・半藤末莉子（1935-）による「母からきいた夏目家のくらし」（1995。後註12にいう表記で『月報一次』巻⑭-14-10-13、『月報精選』237-242）。同『夏目家の糠みそ』（初出・2000。PHP文庫・2003・10以下）。たしかに、『それから』の平岡夫婦も、漸く普及し始めた電気もガスも上下水道も風呂も電話も備えておらず質屋通いをするにもかかわらず下女を住み込ませている。また、『それから』の親がかりの代助の借家にも門野^{カドノ}という書生（一の二、9）、勿論その実家には直木という書生がいる（七の四、九の二。105、131）。しかし、『三四郎』の美禰子の兄の家や『それから』の代助の実家のように裕福な家庭でも、移動手段は自家用車ならぬ（お抱えか雇いかの差があるものの）人力車。産業資本主義への離陸を終える前の世の中で人件費が極端に安

円札の肖像画は、ほぼ二十年周期で、1963年から伊藤博文(1841-M42)、1984年から漱石〔口髭につき⇒後註60。痘痕につき⇒^{あばた}下〕、2004年から野口英世(M9-1928)。これを2024年に引き継いだのは、またしても「明治人」の北里柴三郎(1853-1931)。33年に留学した漱石は日欧の文明開化の落差を前にして「〔欧州の現在の水準〕ヨリ先ニ進む者アラン〔27年にペスト菌を発見した〕北里氏ノ菌学ノ如シ去レドモexceptionハexceptionナリ general conditionニアラザルコトヲ知ラザル可ラズ」とロンドンで(自らexceptionたらんと期してか)ノートに記す(巻②-67)。北里の没年に三十歳の俳人・中村草田男(M34-1983)が幼少期を懐かしんで詠んだのが「降る雪や 明治は遠く になりにけり」。以下では、「明治という時代」に留意しよう⁷。第二に、漱石の持病について。回想を織り込む『硝子戸の中』(巻⑫。T4年1月～2月。以下『硝子戸』)の二十二に曰く、「此二三年来私

かった頃の話。「喰う、寝る、住む」と若干の小違い〔ないし給金。月120円程度の家計で2円程度⇒巻⑩-330の注解〕が労働の対価として提供される「住み込みの職業」に応じたのが(地方都市でも)、「女中(下女)」と呼ばれた下働きの女性や『吾輩は猫である』(以下、『猫』)一(7)にいう「書生という人間中で一番憐れな種族」〔ちなみに、春廻舎籠(坪内逍遙の筆名)が「勸善懲惡」の枠組みを離れた我が国初の写実小説『当世書生気質』M18～19で描いたのは自墮落で素行の悪い書生)。親戚の場合もあるが、多くは赤の他人同士が(女中部屋や書生部屋はあるものの)一つ屋根の下に同居する時代〔朝日入社後の夏目家のお手伝いにつき、⇒後註13〕。ライフラインの普及と工場などへの労働力の移動にともない、女中や書生は富裕層のシンボルに変質し始める。

7 漱石の小説それぞれに織り込まれている時代背景については、小森陽一の一連の講義(かがわ出版)、『13歳からの夏目漱石』2017、『戦争の時代と夏目漱石』2018、『感染症の時代と夏目漱石』2021を参照。明治時代の法制度は22年2月11日公布の大日本帝国憲法(明治憲法)ならびに31年施行の明治民法を挟んで二分される。収入vs項目別支出の割合をイメージするために当時の数字を挙げる。100銭=1円の貨幣価値の今日への比定は難しいが、約5千倍から2万倍がひとつの目安。週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞出版・1988や森永卓郎監修『物価の文化史事典 明治／大正／昭和／平成』展望社・2008を参照。また、明治期の風俗や「経済生活」については巻⑩『道草』の注解のほか、植田満文『明治大正風俗語典』角川書店・1979を参照。

は大抵年に一度位の割で病氣をする。さうして床に就いてから床を上げる迄に、略一月の日数を潰してしまふ。／私の病氣と云へば、何時も極つた胃の故障なので⁸、いざとなると、絶食療法より外に手の着けやうがなくなる。医者 commands ばかりか、病氣の性質そのものが、私に此絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、余計瘦せこけてふらふらする。一ヶ月以上掛るのも重に此衰弱が祟るからのやうに思はれる」。死因は胃潰瘍による大量吐血⁹。第三に、岩波書店版の漱石

8 「神経衰弱」(⇒後註86)と糖尿病〔⇒真鍋嘉一郎「雨月莊談片(談)」1937。後註12の表記で『追想』302〕は別論。漱石は胃弱にもかかわらず愛煙家。談話「文士と酒、煙草」によれば、一日に紙巻き「敷島」(20本10銭)二箱くらいだが下戸(42年。巻25-336)。紙巻き煙草がキセルによる刻み煙草を駆逐しつつあった時期(『猫』一(22)の主人・苦沙弥先生は専売前の民間の紙巻き「日の出」、二(65)の迷亭は烟管派。『野分』九(233)の煙草談義)、政府は37年から日露戦争の戦費調達のために煙草と酒を専売(生産・流通・販売を国家の全面的な管理下に置くこと)にして課税を強化。本居宣長(1730-1801)の辞世「敷島の大和心を人問わば朝日に匂ふ山櫻花」にちなんで「敷島」、「大和」、「朝日」、「山櫻」という四銘柄を発売。この順による価格設定の最高級銘柄「敷島」は当初は8銭。長女・松岡筆子(⇒後註22)の「父 漱石」によれば、「父は随分呑気でした。敷島と朝日とどちらが値がいいのか知らなかったり、若い時には早稲田(界限の)田甫を歩いて稲を見てあれは何という草だと連れの人にたずねたという話(⇒後註26)もきました」(1925。『追想』377)。日露戦争前後に高まった「大和魂」熱を評して『猫』の苦沙弥先生曰く、「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇った者が^(あ)ない。大和魂はそれ天狗の類か」(六、243)。

9 40年に職業作家に転じた頃の漱石は、身長159cm位・体重46.8kg前後(巻23-118)。後述の大患から回復後の44年の日記には体重の記録が頻出する。しかも、換算の手間は判らないが、キログラムで記して尺貫法の数値を付す(後註39本文・筈本・19によれば、小学校時代の漱石は「算術が下手」。予備門の学生の漱石がアルバイトで幾何学を教えていたことにつき、⇒^(中)の5)。たとえば、44年1月21日では、「五十四キロ八百(十四貫五百七十六匁)」(巻20-271)。

漱石を襲った「修善寺の大患」について。43年6月18日に胃潰瘍で長与病院(10年開設の我が国初の胃腸病専門病院。現・新宿区の平山胃腸クリニック)に入院、7月31日に退院し8月6日に療養のため静岡県伊豆市の温泉地・修善寺の菊屋旅館(現在も営業)に移動(⇒松根東洋城)、8月24日の大量吐血で人事不省(後註17の表記で『日記』145-185、『思ひ出す事など』ハ以下。旅館に派遣された

全集について。文庫版や新書版も含めて様々なものがあるが、一周忌を期した大正6年版(全14巻。1917~19)に始まり没後百年記念版『定本漱石全集』(全28巻・別巻1。2016~19。以下、『定本全集』)に至るまで(未完結版、新版、重版を含めて)15種類¹⁰。一貫して歴史的仮名遣だが、没後五十年記念のいわゆる『菊大判全集』(1965~67)までが旧字体、その重版などを挟んで、岩波書店創業八十年記念の四六版の新版『漱石全集』

長与病院の若き担当医が森成麟造)、回復後10月11日に帰京し長与病院に直行、翌年2月26日に退院。救急車の導入(1931年)前の病人の移動手段は「釣り台(担架の一種)」。修善寺での数日間の吐血総量は少なくとも「680g」。血液の総重量は体重の十三分の一。体重47kgとすれば、血液総量3600gの約18%を失ったことになる(50%失うと失血死)。森成と「禁烟の約」を成すも、「今朝臥して思う、さのみ旨くなくけれどそれほど害にならぬものを禁ずる必要なし。食後一本ずつにす」(43年9月10日。『日記』159)。

その後も、44年8月の関西への講演旅行の最終19日に大阪の(現在も天王寺区にある)湯川胃腸病院に入院し9月14日に帰京〔参照：44年10月13日付け森成宛、巻②3-486〕。関西初のこの種の病院を35年に開設した院長の湯川玄洋(1867-1935)を、漱石はT元年から連載の『行人』の「(友達)十六」で「色の浅黒い鼻筋の通つた立派な男で、言葉遣いや態度にも容貌が示す如く品格があった」と描く。玄洋の娘婿が湯川秀樹博士(M40-1981。旧姓小川)。T4年3月19日からの京都旅行でも病臥ののち4月17日に帰京。T5年4月から5月にかけて再発するも自宅療養で回復。11月22日に再発し12月2日の大吐血による人事不省のまま9日に逝く。なお、京都の病床で看病にあたった漱石ファンの芸妓梅垣さぬ(源氏名・金之助)の「漱石先生(談)」(1929。『追想』332-338)を参照〔「紅梅や舞の地を弾く金之助」、後註16の表記で『俳句集』192〕。

『猫』一(10)の苦沙弥先生は、「胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。そのくせに大飯を食う。大飯を食った後でタカジヤスターゼ〔高峯謙吉が27年に創製した強力消化剤の商品名〕を飲む」。また、長女筆子曰く「父は胃が悪かったので、始終薬をのんで居りました。大概日に六回のむのでございます。よく父の薬のオブラートをつつんだことを覚えて居ります」〔前註8・松岡・375。⇒後註95〕。

- 10 他社の全集も含めて、矢口進也(1929-2011)『漱石全集物語』(初出・1985。岩波現代文庫・2016)を参照。朱の下地に緑色の模様を配した岩波版全集の表紙ならびに岩波文庫版のカヴァーの意匠は、わが国初の「著者による自作の装丁」を試みた漱石が『心』(岩波書店・T3)のために周の石鼓文の拓本から選んだもの(巻②⑦-497)。

(全28巻・別巻1。第一次刊行版：1993～99、第二次刊行版：2002～04。

以下、『新版全集』以降が新字体¹¹⁾。いくつかの全集の各巻に別刷りで付された「月報」ほかの同時代人の「証言」なども有力な情報源である¹²⁾。

2) もちろん、漱石への「表玄関」は小説や随想(⇒国の11)。しかし漱石門下¹³⁾による或る浩瀚な漱石論に曰く、「漱石は、何を書いても、その

11 本稿が依拠する『新版全集』の編集方針は、「〔第一次刊行版の〕内容見本」によれば、「最良のテキストを〔各地に散在する〕自筆原稿にもとめ、能うかぎり忠実にそれを活字化することによって漱石の最も根源的な姿を浮かびあがらせよう」というもの。この方針と校訂とのバランスをめぐる論議につき、前註10・矢口の柴野京子による解説230以下を参照。第二次刊行版は第一次刊行版以降に発見された新資料の補充や注解の差し替えなどを行い、また、『定本全集』も第二次刊行版に同様の補正を加えるが、本稿での引用は三者の異同に立ち入らず、丸中数字の巻数に第一次刊行版の頁を付記する(巻○-△。巻27-339-455に第一次刊行版への補遺)。岩波文庫版がある場合の引用文はそれに拠る。

漱石の小説の章立ては、一回読み切りの『ホトトギス』掲載分は章のみ。また、新聞連載では、当時の紙面で横一欄の一回分(約1800字。漱石専用の原稿用紙(19字×10行)で約10枚。巻5、8、10、11、15、20の口絵。岩波文庫版で約二頁半)を書きためることなく毎日「節」番号を付して社に郵送した(⇒後註124)。いずれであれ文庫版が章のみで区切っている場合には、底本の章(節)番号に改版後の文庫版の頁を付記する。対象は、『吾輩は猫である』(1990)、『坊ちゃん』(1989)、『二百十日』(2016)、『野分』(2016)、『虞美人草』(1990)、『三四郎』(1990)、『それから』(1989)、『門』(1990)。

12 同時代人の「証言」については、④月報の合本『漱石全集月報 昭和三年版 昭和十年版』(1976。『菊大判全集』に第17巻『索引』を加えた1974年版全集の附録。以下、『全集月報』)、⑤『新版全集』の『別巻 漱石言行録』(1996。引用頁は別-△)がある。主として④と⑤を底本にして49篇を再録するのが、十川信介編『漱石追想』(岩波文庫・2016。以下、『追想』)。現代の識者による『新版全集』の各刊行版の月報は、「月報一次」または「月報二次」の別と月報添付の巻数と月報の通し番号と頁数を巻○-△-□として引用(番号は別巻を含めて29まで)。なお、「月報一次」巻28-29-12-16に『新版全集』全巻の「正誤表」。「月報一次」と「月報二次」から48篇を再録して『定本全集』の予約者特典版としたのが『私の漱石——『漱石全集』月報精選』(軽装版・2018)(以下、『月報精選』)。

13 漱石門下の衆目一致する定義は見当たらない。漱石は、<来る者は拒まず、去る者は追わず>という姿勢で面談や文通に応じた。高浜虚子「漱石氏と私」に曰く、「〔『猫』(38年～39年)によって〕氏は一躍して文学界の大立者となつてしまった。各種の雑誌は競うて君の作物を掲げ、その待遇も互いに他におと

時その時の漱石を、その中に打ち込んでいないものはない」¹⁴。本稿では

らぬようにと競争するようになって来た」(1918。同『回想 子規・漱石』岩波文庫・2002・171)。一高教授と東大講師と明治大学非常勤と述作を並行させる漱石は38年9月17日付け虚子宛に曰く、「毎日来客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候」(巻22-409)。そこで来訪者のなかでも常連数名に39年10月7日付けで「小生今度から木曜日の午後三時からを面会日と定め候故遊びに御出被下度候」(巻22-572)と伝える。これがいわゆる木曜会の始まり。最終は死の床につく六日前のT5年11月16日。その十年間の参集者は優に百名を越すであろうが、うち十数名を自称・他称で漱石門下と呼ぶようである。松浦嘉一(M24-1967。T5年東大英文科卒。一高教授を経て1949年東大教養学部教授⇒後註33)の「木曜会の思い出」(1929。『追想』148-158)が点描するような毎回十名前後との会話が、夕食を振舞われた後も深更まで続き、後述の漱石山房では泊まる者も。ちなみに、朝日入社後の40年頃の夏目家は、親子七人に「女中」三人の大所帯(⇒後註84)。前註6・半藤・『月報精選』238に曰く、「母(漱石の長女)の子供の頃には、夏目家にはいつも三人はお手伝いさんがいた……。母の話では時には(恐らく赤ん坊が生まれる時でもあったろうか)その数は四、五人のこともあった」。

阿部次郎「夏目先生の談話」に曰く、「先生が現代の年若い文士の中から自ら有望であると見込をつけた者を撰んでこれをその門下に羅致しようとしたと見るのは世間の曲解若くは邪推である」(1917。別-350)。また、和辻哲郎「漱石の人物」は、「若い連中に好きなやうに喋舌らせて置いて、時々受け答へをする位のものであつた」と述べて、「木曜会で接した漱石は、……諧謔で相手の言草をひっくり返すといふやうな機鋒はなかなか鋭かつたが、しかし、相手の痛いところへ突き込んで行くといふやうな、辛辣なところは少しもなかつた。むしろ相手の心持をいたはり、痛いところを避けるやうな心遣ひを、行き届いてする人であつた。……しかし漱石は、さういふ心持や心遣ひを言葉に現はしてくどくどと述べ合ふといふやうなことは、非常に嫌ひであつたやうに思はれる」(1950。別-364-367。参照：『書簡』49、『往復書簡』145にいう漱石の「煩瑣」嫌い)。なお、和辻「夏目先生の『人』及び『芸術』(抄)」に曰く、「諧謔は先生の感情表現として欠くべからざるものであつた。先生の諧謔には常に意味深いものが隠されている。熱情、愛、痛苦、憤怒など先生の露骨に現わすことを好まないものが隠されている」(1917。『追想』144)。

- 14 小宮豊隆『夏目漱石』(初出・1938。岩波文庫(上・中・下)・1986。以下、小宮)。本文中の引用箇所は上・9。断簡零墨まで収録せんする岩波版全集の(現在まで踏襲されている)各巻の編成は漱石二十回忌記念の昭和十年版全集(全19巻。1935~37)に由来する。これを編集した小宮は各巻末に連載した「解説」十八回分を、漱石二十七回忌を期して『漱石の芸術』に纏めた(岩波書店・1942。以下、小宮『芸術』)。

生活を窺うに便な「勝手口」をパッチワークの素材の探求先とする。「勝手口」(巻⑩～巻㉗)の模様の紹介から。全集の巻数の順に先ず、語り口を伝える講演(巻⑩)。「〔演説を〕頼まれた事は今迄大分ありましたけれどもみんな断つて仕舞ました」という枕で始まる漱石の初の講演は、40年4月に入社した東京朝日新聞社の社員として同月20日に東京美術学校(現・東京芸術大学)の文学会の開会式で行った「**文芸の哲学的基礎**」(巻⑩-64-137)。翌41年2月15日の「**作家の態度**」と題する東京朝日主催の神田美土代町での講演(巻⑩-161-250)について、大阪朝日に入社したばかりの長谷川如是閑しげ かんの「始めて聞いた漱石の講演」に曰く、「漱石は、ざわついた会場の空気に応じた、言葉とジェスチャーとで先ず聴衆の心理を捉えて置いて、徐ろに話をすすめて行ったが、私の最も驚いたのは、大劇場で世話物を演ずる俳優のように、通常の会話風の言葉を大声で語り得る技術だった。……漱石はあの座談風の言葉を二千人もの聴衆で埋めている会場に〔マイクなしで〕行き互のように発声することができるのである。これには全く驚かされた。／相当むずかしい問題を通俗に崩して話す手際に至っては、……羨ましいと思って見た……」(1937。『追想』192)¹⁵。

つぎに、「余技」の俳句・詩歌と漢詩文(巻㉗～㉘)¹⁶。それらの効用に

15 参照：『野分』十二(275)の道也の演説。漱石の校閲を経たものは、「著述」として巻⑩(7篇)。それ以外の7篇は巻㉘。三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫・1986(以下、『文明論集』)や小森陽一編著『夏目漱石、現代を語る 漱石社会評論集』角川新書・2016(以下、『社会評論集』)が如是閑のアレンジ(巻㉘-467)より44年の関西講演4篇(⇒後註129)などを収める。漱石の声量は、謠の稽古の賜物か(⇒後註97)。東京朝日と大阪朝日につき後註109。

16 修善寺大患を脱した頃に句作と詩作が旺盛であったことにつき、『思ひ出す事など』五。参照：吉村冬彦(=寺田寅彦)「漱石と俳句と漢詩」(1928。『追想』130-132)、松根東洋城「先生と俳句と私と(抄)」(1917。同255-266)、同「先生と病氣と俳句」(1928。別-243-247)。最晩年の漢詩の写真は巻㉘の口絵。

坪内稔典編『漱石俳句集』岩波文庫・1990(以下、『俳句集』)が、現存するおよそ2600句のうち848句を収める。また、吉川幸次郎『漱石詩注』岩波新書・1967の増補版にあたる『漱石詩注』岩波文庫・2002(以下、『漱石詩注』)に曰く、

つき、談話「文話」に曰く、「俳句や漢詩を心得て居ると、文章を非常に緊縮させるのに有効だ。だらだらと数行を費やして書くところでも、一句、或ひは一行にして済すことが出来る場合もある。／単に文章を簡潔にすると云ふことばかりでなく、又、或る書物を観ると云ふことに就ても、俳句の心得があると、非常に有益なことがある。一体俳句と云ふものは、自然なり人事なりの、些つとしたところに目を附けるものであるから、普通の人の気の附かぬ所を、俳句の趣味を養つたお陰で見出すことがある」(43年。②5-380以下)。漱石は絶筆となる『明暗』第188回〔巻⑪の口絵〕をT5年11月21日に朝日に郵送してから知人〔辰野隆^{ゆたか}。M21-1964。7月に東大仏文科卒。後の仏文科教授。その弟子が、加藤周一(1919-2008)や大江健三郎(1935-2023)が私淑した渡辺一夫(M34-1975)〕の結婚式に出席し翌日から死の床につく。11月20日までの約百日間に作った漢詩は七十五篇。T5年8月21日付け久米正雄・芥川龍之介宛に曰く、「毎日百回近くもあんな事〔=『明暗』〕を書いていると大いに俗了された心持になりますので三、四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。そうして七言律^{シチゴンリツ}です。中々出来ません。厭になればすぐ已めるのだからいくつ出来るか分かりません」〔後註19の表記で『書簡』307。言は漢詩一句(一行)の文字数(一般的には五または七)。四句なら「絶句」。八句なら「律詩」。七言律詩は難度が高い〕。

さらに、日記や断片(巻⑱～⑳)¹⁷、ノート(巻㉑)¹⁸や書簡(巻㉒～

「漢詩は、夏目氏の文学において、相当の比重を占める。おそらくは俳句よりも、より多くの比重を占める。少なくともその自覚においては、そうである。／……(明治期の)新聞には、短歌欄、俳句欄とともに、必ず漢詩欄が、一般読者の投稿を迎えた。詩といえ、すなわち漢詩を意味し、日本語の詩は、新体詩と呼ばれて区別された」(3)。なお、古井由吉『漱石の漢詩を読む』(岩波書店・2008)は晩年の漢詩について小説家としての自身の解釈も提示する。

17 日記と断片(メモ)は、31年頃からT5年まで断続的に遺されている。『菊大判全集』を底本とする岩波文庫版として、平岡敏夫編『漱石日記』(1990。以下、『日記』)。

②4)¹⁹。鈴木三重吉「漱石先生の書簡」に曰く、「先生は純情な、正直な、規帳面な人だっただけに、ひとからの手紙に対しても、一々克明に返事を出されたものである。……めいめいの煩悶を訴えたり、感想や議論を述べて来た場合などには、しばしば長い手紙をいわずかいて、慰撫したり訓諭したり、教導されたのはいうまでもない」(1928。『追想』133)。そして、<記者の聞き書き>並びに<記者の速記による講演>などの談話(巻②5)。小宮『芸術』577に曰く、「漱石が『猫』を書いて有名になった時分は(⇒前註13)、……多くの雑誌が、争つて名士の談話筆記を掲載した時期であった。その為当時の雑誌記者の仕事は、名士を訪問してその談話を取つて来るといふ事が、^{オモ}重な仕事であるやうな観を呈した。……従つて漱石が、世間的に有名になればなる程、漱石の^{モト}許には、さういふ意味で、多くの雑誌記者が集まつた。正直で親切で、頼まれれば厭と言ひかねる漱石は、別に厭な顔もしないで、^{イチイチ}一一その要求に応じた」²⁰。加うるに、前註12にいう

18 漱石の終の住み処となる後述の借家(通称漱石山房)で保管されていたノートのほか蔵書や日記・書簡・自筆原稿などは、1944年に小宮豊隆の尽力によって東北大学附属図書館に移管され戦災を免れた(以下、漱石文庫)。参照:大原理恵「東北大学附属図書館所蔵 漱石文庫身辺自筆資料等の整理過程について——付大学図書館と図書館長」東北大学附属図書館調査研究室年報第10号(2003) 1-12(⇒後註79、80)。

19 『追想』133-136。巻②②~②④から判るように当時の消印は午前6時から午後12時までの一時間刻み。東京市の区部(⇒後註50)では安価で豊富な労働力によって即日配達が原則。葉書・封書2252通を収録する『菊大判全集』を底本とする、三好行雄編『漱石書簡集』岩波文庫・1990(以下、『書簡』)。『新版全集』は、年次不詳のものも含めて22年からT5年までの2502通を収める。『新版全集』と講談社版『子規全集』16巻のうちの三巻(1975、77、78)で編まれたのが、和田茂樹編『漱石・子規往復書簡集』岩波文庫・2002(以下、『往復書簡』)。書簡の写真として巻①⑦、②②、②③の口絵。

20 『野分』六(180)の道也先生も中野春台という若造の所に談話の筆記に行く。もっとも、42年1月10日付け坂元雪鳥宛に曰く、「一番陳腐なのは雑誌記者だらうと思ふ。主人公に何等の利益をも与へない。夫でもつて来て雑誌へは人のわる口を書く」(巻②③-242)。雑誌記者からの「証言」として、中村武羅夫「夏目漱石(抄)」(1925。『追想』249-254)。なお、巻②⑤と後掲の巻②⑦とともに列冊

月報などでの「証言」。本稿の㊦と㊧では、「勝手口」から取材したパーツをそのまま紡ぎ、その背後にあるものを探る作業は㊨に譲る。

本名は夏目金之助、元年に鹽原家の養子となってからは鹽原金之助〔以下、塩原〕。「漱石」はペンネーム。本名とは異なる呼び名(雅号)を自作に冠するという江戸期の風習が明治十年代生まれの世代頃まで続く〔参照：註51の人名一覧〕。「漱石」という号の典拠は江戸期いらい児童や初学者用の教科書として多用された唐代の著作『蒙求』^{もうぎゅう}²¹。巻㉔の注解に曰く、「かつて孫楚が隱居を決意した時、『石に枕し、流れに漱ぐ』(世俗を離れた静かな生活を意味する)というべきところ『石に漱ぎ、流れに枕す』とってしまった。誤りを指摘された彼は『枕流は耳を洗うため、漱石は齒を磨くため』と強弁し、自らの誤りを認めなかった」(585)。本稿では誕生から「漱石」と呼ぶ。

本稿の目的地は木庭氏の漱石「論」の「とば口」。ナビゲーターは²²、『新

(上・中・下)を構成する巻㉔は、「作文・レポート・英作文・草稿・雑纂」を収録する。そのうち草稿は、「文学論序」(⇒後註24)、「道草」、「明暗」。

- 21 本人曰く、「小生の号は、少時『蒙求』を読んだ時に故事を覚えて早速つけたもので、今から考へると、陳腐で、俗気があるものです。今更改名するの億劫だから、其儘用ひて居ります」(「文壇諸名家の雅号の由来」(『中学世界』、41年11月。巻㉔-464。同旨：巻㉔-377、巻㉔-467)。初出は、正岡子規の『七草集』を批評する漢文と漢詩で書かれた22年5月25日付けの『「七草集」評』の末尾に記された「漱石妄批」(巻㉔-485-498、『漱石詩注』308-313。同年5月27日付け子規宛(『書簡』15、『往復書簡』18))。松山時代には自分の借家を「愚陀仏庵」と呼んで「愚陀仏」という号も用いた(⇒後註62)。参照：奥本大三郎「漱石という雅号」(1995。『月報一次』巻㉔-13-9-13、『月報精選』230-236)。もっとも、T3年4月10日付け四方田美男(埼玉在の作家志望の漱石ファン)宛に曰く、「号などは入らぬものですからよしになさい私は号を有つてゐるが号を有つていない人がつまらないといふ訳にはなりませんつまり私は余計なものをもつてゐるのであります」(巻㉔-281。参照：『書簡』277)。

- 22 漱石の生活についての最強の情報源として喧伝されてきたのが、「述者 夏目鏡子・筆録 松岡譲『漱石の思ひ出』」(改造社・1928。廉価版(ないし普及版)・岩波書店・1929。文春文庫・1994(以下、1929年版で『思ひ出』))。口述者は、広島県士族で医師を経て貴族院書記官長(現・参議院事務総長)となっていた

版全集』編集部による二段組みで日録風の「年譜」（巻②⑦-593-699）と（精度に大いに問題があるものの）巻②⑧「総索引」。ナビに設定する経由地の指示を仰ぐのが『文学論』大倉書店・40年5月²³の「序」。漱石は、教師生活との訣別を期したのか、転進先未定のまま39年11月公表の「序」²⁴で幼少時の漢籍好きが英文学に転向し留学中に文学へと舵を切って帰国し東大で行った講義をもとにした「此未定稿を版行する」経緯を語る。本稿では、上で<①生い立ち>、<②学生時代>、中で<③学生と教師の二重生活>、<④留学前の教師生活>、<⑤留学時代>、<⑥一高教授・東大講

中根重一（1851-M39）の長女^{じゅういち}で28年12月27日に松山から上京した漱石と翌日に見合いをして翌年6月9日に漱石の赴任先の熊本で挙式した十歳年下の鏡子夫人（M10-1963）。筆録者は、長女筆子（M32-1981）の夫で漱石門下の小説家松岡譲（M24-1969）。漱石十三回忌の前年から夫人が松岡の質問に答える形で口述し、雑誌『改造』に連載された筆記を松岡が整理した。些細な事実誤認が点在することは致し方あるまい。これに対して、事実誤認の背後に松岡の<恣意性>を読み取り内容の信憑性に疑問を呈する向きもある。参照：山下俊介「一冊の本について」（1997、『月報一次』巻②①-274-7）。引用に際しては、他の「証言」との照合を要しよう（⇒後註83、117）。ちなみに、見合いの仲立ちは、矢来町に住む郵便局勤務の漱石の三兄直矩^{なおただ}（⇒後註44）の同僚で、同じ町内に隠居していた鏡子の祖父の囲碁仲間。巻②②の口絵に二人の見合い写真。

23 岩波文庫版（2007）を『文学論』上・下として引用。底本につき後註80を参照。40年5月30日付け菅虎雄宛で「校正者の不埒な為め誤字誤植雲の如く雨の如く痼癩が起つて仕様がなない」（巻②③-59）と憤る漱石は、よほど腹に据えかねたのか、朝日新聞で印刷所を糾弾すべくその記事の執筆を鈴木三重吉に依頼（巻②③-67）。その記事や版元による弁明などの顛末につき、服部徹也「『不都合なる活版屋』騒動からみる漱石『文学論』——単行本の本文異同調査を中心に」三田国文学61巻（2016）31-49。

24 「明治三十九年十一月」と記された「序」（巻④③-15、『文学論』上・13-27）は、「文学論序」と題して39年11月4日の読売新聞に掲載された。冒頭に、「記者曰く、こは近日刊行せらるべき夏目氏の『文学論』の序なり、文学上有益なりと思ふを以つてこゝに掲ぐるこゝなしたり」とある（巻④③-709。大阪朝日は『文学論』刊行の翌月9日に三分の一ほどの縮約版を掲載）。その構想メモと下書き原稿とおぼしきものの翻刻として、後註80・村岡・406-409、巻②⑥-75-80を参照。もっとも、39年11月6日付け森田草平宛に曰く、「文学論の序は……あの通りの事を読んでへエーと云つてもらへばいい。読売へのせる必要もなかつた。何かくれといふからやつた」（巻②⑥-610以下。⇒後註111）。

師兼任時代>、<京都帝国大学文科大学招聘問題>、<最後の方針転換。東京朝日新聞社への入社>の順に辿る。

3) <①生い立ち>前註22にいう見合いのための上京を前に28年12月18日付け子規宛に曰く、「小生は教育上性質上家内のものと気風の合わぬは昔しよりの事にて、小児の時分よりドメスチック・ハピネスなどいふ言は度外^{いげん}に付しをり候へば今更ほしくも無^{これなく}之候」²⁵。家庭的に薄幸であった所以は出生に始まる。牛込馬場下町²⁶〔現・新宿区喜久井町一〕の名主²⁷・夏目小兵衛直克(1817-M30)は、後妻ちゑ(千枝:1826-M14)との間の末

25 『書簡』51以下、『往復書簡』186。『思ひ出』56に曰く、「養家では結局養子ですから親身の愛情もなかったのでせうし、実家では実家で父が養子にやつた奴だとあって、これ又つつかけものにするといった具合で、家庭的には謂はば孤児同然の身の上で、随分苦勞をしたものらしいのです」。但し、後註68。

26 病床の子規が34年5月30日に綴った22年か23年頃に漱石の実家近辺を二人で散歩中のエピソード。「そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居る……。この時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米はこの苗の実である事を知らなかったといふ事である。都人士の救麦を弁ぜざる事は往々この類である」(『墨汁一滴』岩波文庫・1984年改版・133。⇒前註8)。「救麦を弁ぜず」とは、『広辞苑』によれば、「豆と麦との区別ができないこと。おろかで、卑近な物事の区別をも知らないことのとえ」。

27 江戸の名主は、町奉行の支配のもとで町年寄に従属しその指図により(ある程度の司法権や警察権を含む)町政を担当する町人。牛込の11ヶ町を担当する夏目家は、一年交替の年番名主ではなく、代々の当主による世襲名主。『硝子戸』二十一に曰く、「私の家も侍分ではなかった。派出な付合をしなければならぬ名主といふ町人であつた。……青山に〔小作させている〕田畑があつて、其所から上つて来る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた」。また、『猫』九(364)に曰く、「〔吾輩の主人の苦沙弥先生は〕当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上の御威光となると非常に恐ろしいものと心得ている。……主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬つたのかも知れない」。

ちなみに、深川の材木商の息子で大阪朝日に入社した長谷川如是閑は、訪ねてきた漱石の「言葉尻に『……カイ』といふ東京言葉の特徴の殊に顕著に現れたアクセント……を聴いて、紛れたお父さんに出逢つた子供のやうに、泣きたい程嬉しいと思つた」(「初めて逢つた漱石氏」年不詳。『全集月報』67)。

子で第六子（五男）として旧暦1月5日²⁸（新暦では2月9日）に生まれた漱石を²⁹、高齢出産の母に代わる乳母を求めて、夜店を張る古道具の大道商人の里子に出し乳離れするまで預ける。父母いずれかが四十代以上の夫婦の子を「年寄り子、恥かきっ子」と呼んで世間体が悪いとする時代。子を家に置いておきたくないのか父は、9月8日に改元された明治元年の11月頃に漱石を、かつて夏目家に居た書生同様の人物で名主株を購入して浅草の戸長（今日で言えば区長）となっていた子のない塩原昌之助・やすという29歳同士の夫婦の養子に出す。塩原家では、『道草』の島田のモデルとされる養父と、お藤さんのモデルとされる日根里（野）かつというハ

28 江藤『漱石（第一部）』20は「この日〔庚申〕に生まれると大泥棒になるという俗信のあった日に生まれた子でもあった。彼の名前につけられた『金』の字は、庚申の呪いをさけるための厄除けの文字だった」とするが、典拠は不明。ちなみに、陰陽五行道では、十干の庚の気は「陽の金」、十二支の申の気は「陰の金」。二字ともに「金性」。カネのことで苛まれるという俗説か。

29 以下、巻②7-599-602のほか、『硝子戸』や自伝的小説とされる『道草』（巻⑩。T4年6月～9月）の関係箇所への注解に拠る。長らく兵庫の大名・明石家の上屋敷で御殿奉公をして27才頃に漱石の父に後妻として嫁した母につき、『硝子戸』三十七、三十八。父と先妻との間の娘二人（『硝子戸』十四）のうち姉・佐和（1846-M11）は後妻の甥にあたる福田庄兵衛にすでに嫁し、妹・房（1851-M40）が嫁した高田庄吉は『道草』の比田のモデル（『硝子戸』十六）。

もっとも、実在の人物と文学的形象との対応という意味でのモデルについて言えば『私の個人主義』（⇒後註38）に曰く、『坊ちゃん』の中に赤シャツという渾名を有っている人があるが、あれは一体誰の事だと私はその時分よく訊かれたものである。誰の事だって、当時その中学に文学士といったら私一人なのですから、もし『坊ちゃん』の中の人物を一々実在のものとするならば、赤シャツは即ちこういう私の事にならなければならぬので——（『文明論集』108、『社会評論集』179）。また、『行人』の第二編「兄」の弟・二郎の「モデル」に擬せられた阿部次郎は、前註6・阿部・354に曰く、「先生の小説ほどモデルのない——若くはモデルを思わせない小説は少いであろうが、〔和歌の浦での阿部次郎の体験を小説に活かすという〕かう云ふ浅い意味で現実の連想を用いたり、日常生活の写生を挟んだりすることは珍しくなかったやうに思ふ」。この意味での「モデル」の例解として、小宮豊隆「『三四郎』の材料」（1936。『全集月報』271-274）、同「『行人』の材料」（1937。同・335-342）を参照。但し、作者の創造による文学的形象という意味でのモデルにつき、PPW27以下を参照。

歳下の後家さんとの色恋沙汰が原因で夫婦喧嘩が絶えず³⁰、当時は死の病の結核を患っていた長兄大助(1856-M9。幼名・大一)がこれを知って9年7月頃に「当主が実弟を養子とする」という意味の「準養子」として漱石を引取る。しかし、塩原家が漱石の復籍を渋ったため「事実上の養子」に留まる。兄は独身のまま20年3月に逝去(『硝子戸』三十六)。復籍は21年1月(⇒後註47)。

4) <②学生時代>。まずは、漱石の頃の学校制度のイメージが必要。以下は、根幹部分についての今日のそれとの大雑把な対応関係。対象は現在の①小・中〔初等教育〕⇒②高〔中等教育〕⇒③大〔高等教育〕のうちの③。しかも、「官立」つまり「国の予算(官費)」で運営される機関のみ³¹。専門学校(⇒後註40)や府県立(⇒後註62)や私立には及ばない。現在の学部は文科大学や工科大学などの単科大学(college)、学部長は単科大学の学長、学長は単科大学を束ねる帝国大学(university、総合大学)の総長に匹敵する。また、今日の大学の履修科目のうち、専門科目を提供するのが旧制の(修了年限四年の)大学³²、また、それ以外の(今日では全学

30 昌之助はやすを離縁して、かつと再婚する。再婚後の二人につき、関莊一郎『『道草』のモデルと語るの記』(1917年。別・475-499)を参照。

31 官尊民卑による制度設計は徴兵制(⇒後註49)など多岐に亘る。官の内部でも、明治憲法下での給与生活者のうち、給与(俸給)の原資が国費の場合が(勤務地が府県であっても)官吏、府県の場合が吏員。両者合せて官員。官吏のうち軍務に服するのが武官、それ以外が文官。『猫』七(265)は羽織や袴を身につける人間を嗤って曰く、「昔の武士今の官員などは皆この種属である」。なお、明治期の定年(定限年齢)は、服務規程によって異なるが、官民間わず一般には50歳〜55歳。但し、大学教師は各大学の内規によりかつては60歳(東大)又は63歳、現在の標準は65歳。一般の裁判官はかつて63歳、現在は65歳。裁判所のトップたる大審院長は65歳、現在の最高裁長官は70歳。

32 文部省〔現・文科省〕管轄下の大学は、東大(M19)、京大(M30)、東北大(M40)、九大(M44)、北大(T7)、阪大(S6)、名大(S14)〔旧制七帝大。東北大のみT2年から女子に門戸を開く〕。朝鮮総督府管轄下の京城(T13)、台湾総督府管轄の台北(S3)〔戦前の日本と朝鮮半島並びに台湾との関係につき⇒後註127〕。参照：天野郁夫『帝国大学——近代日本のエリート育成装置』中

共通科目、一般教養科目、リベラルアーツ、教育総合科目など様々な名称の科目を提供するのが（予科四年と本科三年からなる）大学予備門。19年に修了年限が短縮され、予備門は（予科三年と本科二年からなる）高等学校に、また、大学は四年から三年になる³³。前者は27年に高等学校（いわゆる五年制の旧制高校）³⁴に改組。旧制高校の入学資格は原則として今

公新書・2017。東京帝国大学総長、文科大学学長のもとでの英文学科などの公称を東大英文科などと略す。私立大学の設立認可は1918年の大学令による。

- 33 飛び級（後述の四修）を度外視した場合、18歳から始まる「十一年制」として発足した高等教育は、19年の改組により「八年制」となる。『三四郎』の主人公は23歳で高校を卒業して修了年限三年の大学に入学し（一の三、12）、また、『それから』三の三（37）の代助は婚姻に父母の同意を要しない満30歳に達したばかりである（旧民法772条。女性は満25歳）。なお、成年年齢は9（1876）年の太政官布告いらい令和4（2022）年3月31日まで20歳。男子の20歳は徴兵適齢でもある（⇒後註49）。

高等教育は、前述のT7年の大学令と高等学校令によって大幅に改革される。さらに、「ポツダム宣言」受諾後の占領下での教育改革の一環として官立大学は、前半五年制の旧制高校を改編した＜二年間の教養課程＞と後半三年制の大学を改編した＜二年間の専門課程（学科）＞を合体した「学部」を単位とする「四年制」の新制国立大学となる。戦後復興を担う人材の早期供給という要請も背景にあったであろう。「大学」に昇格した「旧制高校」を「ポツダム大学」、「大学教授」となった「旧制高校教授」を「ポツダム教授」と称したりした。但し一高は「教養課程」のほかに、小規模の自前の「専門課程」を「教養学科」として接続させた「教養学部」に改組。その複雑さにつき、小谷野敦『東大駒場学派物語』新書館・2009・23以下を参照。〔筆者：新制大学の「学部」の上に「大学院」（前期・修士課程2年、後期・博士課程3年）が置かれた。2000年以降、学生が所属する教育組織を「学府」、教員が所属する研究組織を「研究院」とする試みのほか、国立大学の法人化などの改革などが始まる。参照：PPW196以下、247以下〕

- 34 27年以降に改称あるいは設立された旧制高校のうち、一高（東京）、二高（仙台）、三高（京都）、四高（金沢）、五高（熊本）、六高（岡山）、七高（鹿児島）、八高（名古屋）をナンバーズスクールと呼ぶ（⇒後註63）。高校生のシンボルが白線入りの帽子（『三四郎』一の三（11）、一の六（18）、二の六（35）。大学では角帽、同三の十二（61））。全寮制を原則として、寮生が歌い継ぐのが「寮歌」（土屋祝郎（M41-1996）『紅萌ゆる——昭和初年の青春——』岩波新書・1978）。旧制高校で育まれた大正教養主義と称される文化（⇒阿部次郎）につき、高田恵里子による『文学部をめぐる病い 教養主義・ナチス・旧制高校』（初出・2001。ちくま文庫・2006）ほかの旧制高校論、竹内洋『教養主義の没落：変わりゆく

日の高校に相当する**尋常中学校**卒業。その前課程の**尋常小学校**が今日の義務教育に相当。小学校は男女共学だが、卒業後に進学するのは、男子は五年制の尋常中学校、女子は四年制の**高等女学校**〔その先は私立の専門学校や官立の女子高師。⇒後註54〕。近時の高校進学率は98%を越えるが、日露戦争後の好景気の頃(38年)でさえ、尋常中学校への進学率は8%程度、高校入学者は1470人で入試倍率3.20。高校卒業者は帝国大学に無試験で入学可能(T7年まで)。尋常中学校でも高校でも四年で課程を終えることを**四修**と呼び、秀才の代名詞。大学には、入学資格を高等学校卒業に限定する**本科**と尋常中学校卒業などにも認める**選科**(撰科)がある³⁵。

エリート学生文化』中公新書・2007を参照。〔筆者：この文化の問題性の一端を、丸山眞男「勉学についての二、三の助言」(1949)は、「語学の勉強に哲学書を読むことがいいかどうかという問題から、そもそも個別科学を修める前に『哲学』にぶつかってゆくことの可否という問題に論点が移ってしまったようです。それは私が頭の中に旧制高等学校の学生を描きながら書いている為で。……」と述べて決る(『戦中と戦後の間』みすず書房・1976・383。『丸山眞男集』第四巻・岩波書店・1995・161)。参照：熊野純彦「語学との付き合い、思い出すま」『図書』906号(2024年6月号)6-11の末尾に曰く「おっしゃるとおり」]

- 35 『三四郎』一の三(43)にいう「佐々木与次郎」は、「専門学校(⇒後註40)を卒業して、ことした選科に這入った」。選科では、本科の欠員補充として募集がなされ、課程から科目を選んで履修する。図書館利用には本科生でさえ学年による制約があり(『三四郎』三の五(46))、選科生への制約は様々な方面に及ぶ。本科・選科ともに修了年限は三年。但し、選科を終えても学士号は授与されないので呼称は「卒業」でなく「修了」。検定試験に合格して本科に転科し既修年限を加算して三年で「卒業」することも可能。

のちの哲学者西田幾多郎(M3-1945)は、23年に四高を中退し本科の入学資格を得ないまま上京して27年に選科を修了。『明治二十四、五年頃の東京文科大学選科』(1942)に曰く、「選科生というものは非常な差別待遇を受けていた。……私は少し前まで高校と一緒にいた同窓生と、忽ちかけ離れた待遇の下に置かれるようになったので、少からず感傷的な私の心を傷つけられた。……自由に自分の好む勉強ができるので、内に自ら楽しむものがあつた。超然として自ら矜持するものを有っていた。……有名な夏目漱石君は一年上の英文学にいたが、フローレンツの時間と一緒に(ゲーテの)『ヘルマン・ウント・ドロテア』を読んでたように覚えている」(上田閑照編『西田幾多郎随想集』岩波文庫・1996・30以下)。参照：竹田篤司「漱石・西田・(狩野)亨吉」(2003。『月報第二次』-

ちなみに、6年の地租改正法による「7月から6月末まで」の会計年度は、その後の税制の混乱を收拾すべく17年に「4月から3月末まで」に変更され19年から実施。予算措置を伴う教員の人事異動も連動して3月と4月。しかし、「4月入学・3月卒業」への切り替えは官立学校では遅々として進まず、変更前の会計年度に則って、一学年を7月11日から翌年7月10日までとする制度が維持され、人事異動は学年途中となる³⁶。漱石の官立第五高等学校（20年創立）改組の第五高等学校への転出は会計年度上は29年4月。但し、その前年4月に赴任した愛媛県立尋常中学校（松山中学）では4月卒業（⇒後註63）。

漱石の学生時代についての情報源は、三つの談話³⁷と二つの講演³⁸と『文

巻⑩-16。『月報精選』190-194）。

36 漱石が36年4月に奉職した文科大学の学年暦で言えば、今日の前期・後期制（セメスター制）と異なり三学期制。7月上旬に卒業生を送り出して暑中休暇に入り、**第一学期**は新入生を迎える9月から12月末に始まる年末休暇まで。**第二学期**は翌る1月から春期休暇まで。**第三学期**が4月から卒業まで。東大が4月入学・3月卒業制に移行するのはT9年。『三四郎』（連載は41年9月～12月）の主人公は、7月に五高を卒業して上京する帝国大学一年生という設定で周囲と応接する（一の六、18。⇒小宮豊隆）。しかし、9月11日に始まる講義に教師が出て来ない（三の一、37）。39年8月28日付け（暑中休暇で帰省中の）小宮豊隆宛で<講義ノートが出来ていないので開講は9月中旬にズレ込む。上京は急がなくてよい>旨を伝えて曰く、「今日狩野亨吉先生に京都の模様をきいたら京都の法科大学杯は十月中旬から開講するさうだ随分のききなものである。僕も其うち東京の文科大学で十二月位に開講して見様と思ふ」（巻②②-545）。

37 「落第」（39年6月。読売新聞社『中学文芸』臨時増刊号「名士の中学時代」、巻②⑤-161-166）。「時機が来てゐたんだ——処女作追懷談」（41年9月。『文章世界』、巻②⑤-279-283）。「一貫したる不勉強——私の経過した学生時代」（42年2月。『中学世界』、巻②⑤-317-325）。以下、『落第』、『時機』、『不勉強』。

38 ①学習院（⇒後註57）で行った漱石最後の講演「私の個人主義」（T3年11月25日。巻⑩-581-615、『文明論集』97-138、『社会評論集』169-210）。②東京高等工業学校（現・東京工業大学）文芸部の招きで「無題」として行われ、同部の雑誌に「おはなし」と題して掲載された講演（T3年1月17日）。標題は巻②⑤-71-78では「おはなし」、『文明論集』177-187では「無題」。両方の講演の後日談につき『硝子戸』三十四を参照。

学論』の「序」(⇒前註24)。漱石の小学校卒業は12年。篠本二郎「腕白時代の夏目君」に曰く、「夏目君は幼児より虚言^{ウソ}を吐いたことがなかった。又人一倍然諾(約束)を重んじ、若し余儀なき事故^もありて約束を違えることなど起りし時は、平素の剛情に似ず自から非常に愧^はじて、後日幾回とな^{べんそ}く弁疏をなし、相手の満足するまで気に掛けて止まなかった。尤もこの時代の武士の子供は一般に不文律として、虚言を吐くな、人の物を盗むな、喧嘩したら負けるなを、言わず語らず、固く守っていた頃であるから、今日から見ると、当時の子供の心理状態は多少今日とは相違して居たのである」(『追想』27)³⁹。次いで進学したのが東京府第一中学校。「落第」に曰く、「学校は正則と変則に別れて居て、正則の方は一般の普通学をやり、変則の方では英語を重にやつた。僕は正則に居たのだが……大学予備門(今の高等学校)へ入るには変則の方が英語を余計やつて居たから容易に入れたけれど、正則の方では英語をやらなかったから卒業して後更^{サツ}に英語を勉強しなければ予備門へは入れなかったのである⁴⁰。面白くもないし二三年で

39 篠本(1863-1933)は、徳川家の家臣の末裔で小学校から大学予備門まで漱石と同級(漱石は「お上」と直結した町人の出身。⇒前註27)。鉱物学の専門家となり、27年に漱石に先んじて五高に赴任して同僚となったのち七高に転出。なお、篠本が寺田寅彦に郵送したまま所在不明となっていたこの回想記と後註66「五高時代の夏目君」が1935年に陽の目をみるに至る経緯につき、初出に付された小宮の解説(『全集月報』189。別-571-574)を参照。前述のように、漱石は9年7月に長兄の「準養子」として生家に戻るが、養家から復籍するのは21年1月。生家に戻って以降の生活費や教育費の出所は実家のようなのである(『不勉強』324)。

40 前註39の本文・篠本・26に曰く、「この時代世間では、洋学を学ばざれば人間でない様に考えられた。余等はまだ幼少にして毫も考え及ばなかったが、両親は余に英語学校(明治初年の英語学校を改組した東京英語学校)に入学することを勧めた。然し当時英語学校は希望者多くして入学が六ヶ敷いと云ふので、外国語学校(現・東京外大の前身)の仏語学に入学して、その間別に英語を修めて英語学校に入りて後、大学予備門に進んだ」。当時の予備門や大学の外国人教師による講義は英語。「英語学校」や「外国語学校」は、12年の教育令にいう「専門一科ノ學術ヲ授クル所」という意味での専門学校。専門学校は「比較的高い水準の専門教育を行う学校の通称」でもある(15年創設の東京専門学校(の

僕は此中学を止めて終つて、三島中洲先生〔1830-1919〕の二松学舎（という漢学塾。現・二松学舎大学の前身）へ転じた」（161）。「元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山読んだものである。今は英文学などをやって居るが、其頃は英語と来たら大嫌ひで手に取るのも厭な気がした。兄（長兄大助）が英語をやつて居たから家では少し宛教えられたけれど、教える兄は癩癪持、教はる僕は嫌いと来て居るから到底長く続く筈もなく〔5段階の読本の初め2つで終った〕」（162）。ちなみに、司法省法学校や陸軍士官学校が選抜試験に漢文を科したため、漢学塾の需要が高かった。

ここで「第一の方針転換」が起る。「落第」に曰く、「考へて見ると漢籍（バカ）り読んで此の文明開化の世の中に漢学者になつた処が仕方なし、別に之と云ふ目的があつた訳でもなかつたけれど、此儘で過すのは充らな（つま）いと思ふ処から、兎に角大学へ入つて何か勉強しやうと決心した。……其処（ソコ）で僕もおほい大に発心して大学予備門へ入る為に成立学舎（神田駿河台にあった予備門受験者のための私塾）へ入学して、殆ど一年許り一生懸命に英語を勉強した。……初めの中は少しも分らなかつたが、其時は好な漢籍さへ一冊残らず売つて了（シマ）ひ夢中になって勉強したから、終にはだんだん分る様になって其年（明治十七年）の夏は運よく大学予備門へ入ることができた」（162以下。多少の素地があつたものの、今日で言えば、約一年で外国人教師による英語の授業に堪えうるレベルの英語力）⁴¹。

（ち早稲田大学））。36年の専門学校令では、尋常中学卒業を入学資格とする修年限三年以上の「高等ノ學術技芸ヲ教授スル」官立の学校。医学・歯学・外国語などの一般の専門学校と、農業・工業・商業などの実業専門学校。前註35の与次郎がどのタイプの専門学校かは不明。

- 41 〔筆者：蛇足ながら、漢文の素読と「私は言葉、その構成、変化を、耳と心にとどめ〔る〕』というゲーテの外国語習得術を連想する。ゲーテ『詩と真実』第二部（山崎章甫訳・岩波文庫・1997・51）〕。漱石は成立学舎入学を機に実家を出て下宿生活。予備門入学後は実家から通学したり下宿したりする。大学院進学が決まった26年夏に実家から大学の寄宿舎に移るも、27年9月に出て菅虎雄の下宿に暫く厄介になり、10月16日から翌年4月の松山赴任まで小石川区表町の尼寺法蔵院に下宿（⇒後註41）。27年10月31付けの下谷区根岸の子規宛転居通

17年に東京大学予備門予科第四級〔当時は進級ごとに数字が減るシステム〕に入学したものの⁴²、19年に予備門が第一高等学校に改組され、漱石は19年7月の落第により二級留め置き⁴³。これを契機に「第二の方針転換」が起る。漱石は、腹膜炎のために二級の修了試験を受験できなかった。「落第」に曰く、「教務係の人が追試験を受けさせて呉ないのも忙しい^{せは}為もあるが第一自分に信用がないからだ。信用がなければ世の中へ立った処で何事も出来ないから先づ人の信用を得なければならない、信用を得るには何^{ドウ}うしても勉強する必要がある。と^{かう}悠々考へたので、今迄の様にウツカリして居ては駄目だから、寧ろ初めからやり直した方がいゝと思つて、友達などが待つて居て追試験を受けると切りに勧めるのも聞かず、自分から落第して再び二級を繰返す⁴⁴ ことにしたのである。……若し其時落第せずに、唯誤魔^{バカ}して許り通つて来たら今頃は何んな者になつて居たか知れないと思ふ」(164以下)。漱石における「信用」の位置付けにつき図を参照。

20年9月に一級に進級した漱石に、「第三の方針転換」が起る。「落第」に曰く、「一級になるともう専門に依つてやるものも違ふので、僕は二部の

知に順路図を添えて曰く、「隣房に尼数人あり、少しも殊勝ならず、女は何時までもうるさき動物なり。尼寺に有髮の僧を尋ね来よ」(『往復書簡』138)。参照：『猫』十(382)にいう尼嫌いな主人(苦沙弥先生)の話。

42 太田達人「予備門時代の漱石」(1936。別-15-26)、龍口了信「予備門の頃(抄)」(1936。『追憶』30-35)を参照。

43 17年入学組の修了年限と卒業年次は、十一年制のもとでは、四年の予科は21年、三年の本科は24年、四年の大学は28年であり、17年入学組が19年7月に原級留め置きとなるのは二級でなく三級のはず。しかし、19年の八年制への改組により、予科2年次(三級)であった17年組は、19年4月に予科3年次(二級)に編入されて9月に一級に進級し、卒業は予科では20年、本科では22年。編入後の予科二級で落第して進級できずに同級生に一年遅れた漱石の卒業は、予科では21年、本科では23年。

44 20年3月21日に長兄大助が死亡し、また、臼井家の養子となっていた次兄直則(1858-M20。幼名・榮之助。『硝子戸』十七)も大助と同じ肺結核で6月30日に死亡。三兄直矩(1859-1931。幼名・和三郎)が夏目家を継ぎ、喜久井町の生家を処分して牛込矢来町の借家に移る(『硝子戸』二十三)。

ふらんす 蘭西語を扱んだ。二部は工科で僕は又建築科を扱んだが其の主意が却々
面白い。……此方が変人でも是非やつて貰はなければならない仕事さへし
て居れば、自然と人が頭を下げて頼みに来るに違ひない。然うすれば飯の
くひはづ 喰外れはないから安心だと云ふのが建築科を扱んだ一つの理由。それと元
来僕は美術的なことが好であるから、実用と共に建築を美術的にして見や
うと思つたのがもう一つの理由であった」(165)⁴⁵。そこに、「米山保三郎
といふ友人が……日本でどんなに腕を揮つたつて、セント、ポールズの大
寺院のやうな建築を天下後世に残すことは出来ないぢやないかとか言つて
……それよりもまだ文学の方が生命があると言った。……衣食問題などは
丸で眼中に置いてゐない。自分はこれに敬服した。さう言はれて見ると成
程又さうでもあると、其晩即席に自説を撤回して、又文学者になる事に一
決した。……／然し漢文科や国文科の方はやりたくない。そこで愈英文科
を志望学科と定めた」⁴⁶。参照：『坊っちゃん』九(99)にいう「そそっか
しさ」。

21年9月に本科に進み⁴⁷、22年1月頃に正岡子規と出会う⁴⁸。23年7月

45 『三四郎』二の五(33)にいう赤煉瓦の建物についての野々宮君の鑑賞力。また、十の三(234)にいう美禰子の肖像画につき、古田亮『特講 漱石の美術世界』岩波書店・2014・81-105。同二の四(30以下)の二人の女についての観察眼につき、⇒後註62。

46 「時機」281、「無題」179、「おはなし」72。20年発足の英文科の入学者第一号は21年の立花政樹(1865-1937。⇒後註57)。次が23年の漱石。立花は、30年に二高教授となつたのち中国大陆に転進して税関に勤務し、33年に留学途次の漱石と上海で再会し、42年の漱石の満州旅行では大連の税関長として応接(『満韓とところどころ』十、巻⑫-248、『日記』8、112)。漱石が漢文学・国文学・英文学の質の違いに気づく次第は下に譲る。

47 漱石は、21年1月に漸く塩原家から夏目家に復籍。日根野かつを塩原家に入れてやすを追いついて昌之助は、漱石の復籍に際して<実父が養育料筆墨料など240円を支払う、内金170円を入れ、あとは月々3円ずつ月賦で支払うこと>を約させる(巻⑫-229の「養家離縁証書」、松岡譲「離縁の証書」(1928。『全集月報』83-87))。「傾きかけてゐた夏目の家にはそれだけ余分の貯へがなく、其時は他から借りて返したといふことです」(『思ひ出』58)。月賦も23年に完済して漱石のいわば身柄解放金の肩代わりをした実父と、この約定証書の末尾で

に本科を卒業。9月に帝国大学文科大学(同学年は十余名。英文学専修)に入学し、年額85円の文部省貸費生〔今日でいう貸与型奨学金〕、26年7月に大学を卒業し〔卒業の集合写真は巻⑮の口絵。口髭はない〕、9月に大学院に進学。卒業の前年に実父は徴兵忌避のために漱石の戸籍を北海道

「互いに不実不人情に相成らざる様致度存候成」^{やういたしたくぞんじさふなふなり}と約させた養父が、のちの漱石に金銭を要求する。塩原家を出て酒屋の後妻となったやすもまた、酒屋の娘婿の日清戦争による戦死で家運が傾いてからは熊本時代の漱石に頼る。参照：『三四郎』一の一(8)の爺さんの語り。

- 48 談話「正岡子規」(41年)に曰く、「非常に好き嫌いのあつた人で、減多に人と交際などはしなかつた。僕だけどういふものか交際した。ひとつは僕の方がえ、加減に合はして居つたので、其も苦痛なら止めたのだが苦痛でもなかつたからまあ出来てみた。……彼と僕と交際し始めたのも一つの原因は二人で寄席の話をした時〔子規〕先生も大に寄席通を以て任じて居る。ところが僕も寄席のことを知つて居たので話すに足るとでも思つたのであらう。其から大に近よつて来た」(巻⑮-277以下)。ちなみに、「僕は芝居を見るくらゐなら落語を聞きに行く」で始まる38年8月15日付けの談話「みづまくら」は、三代目の柳家小さん(1857-1930)を評したあと、「何しろ落語家の方が今日の壮士俳優^{たしやう}よりか、数等上なる事は慥^{たしか}かだ」と語る(巻⑮-143-147)。参照：『三四郎』三の四(45)の与次郎による「小さん評」。国語学者の大野晋の「漱石とお弟子さん」に曰く、「『明暗』の文章を読んでいると、ふっと、寄席の講釈師、噺家の口調が文章から聞えてきた。私は東京深川の育ちで、子供のころ寄席によく出入りしていた。漱石も牛込の育ちで寄席にはよく行つたらしい」(1999.『月報一次』巻⑳-29-2.『月報精選』186)。参照：水川隆夫『漱石と落語』増補版・平凡社ライブラリー・2000。

他方、同じ年で幼なじみの子規が主宰する句会に漱石とともに参加し30年から松山中学の漢文教師の近藤元晋(号・我観)による「車上の漱石(談)」(1937.『追想』45)に曰く、「夏目さんには、自分の嫌いな人には物を云わぬと云つたような、一寸融通の利かない所がありはしませんでしたかね。その世間と相容れぬと云つた所が、天性私と相通ずる所があるような気がして、今でも心に残っていますよ。尤も、これは松山時代の印象をその後有名になられてから読んだ物の印象で不知不識の間に補充してるような所も大きにあるでしょうがね」(1937.『追想』45。参照：巻⑮-147)。また、松山中学の同僚村井俊明(生没年不詳)の談「教員室に於ける漱石君」に曰く、「一体極めて黙^{もく}りの人で且超然主義の人ではあったが、然しその中に亦優しい心^{こころ}があった。……荒々しくもないのに何だか庄^{さう}さえつける様な厳かな(まあ然う云つた風な)語調で常に云つて居られた」(1917.『追想』39)。

に送る⁴⁹。漱石が山房に戸籍を移して東京府民⁵⁰となるのは、T3年6月⁵¹。

49 6年以降何度かの改正を経た22年の徴兵令では、徴兵検査という毎年の身体検査を前年12月1日から当年11月30日までに満20歳に達する成年男子（徴兵適齢者）に4月～5月に実施し、合格者は翌年1月10日に三年の全日勤務の常備軍に入営し配備に就く（常備軍を終えたのちは年一度の短期勤務などに就く後備軍）。様々な兵役免除資格があり、官立学校生もそのひとつ（資格喪失後は徴兵適齢者に編入）。漱石の免除資格が26年7月の英文科卒業を以て終ることを案じた実父は、25年4月に漱石を分家して徴兵令の適用除外地域の北海道後志に送籍する。参照：（談）『徴兵忌避問答』（巻25-410）、本多嘯月『夏目先生と春陽堂と新小説その他（抄）』（1917、『追想』241以下）。『猫』六（241）に登場する小説家の号は「送籍」。参照：前註7・小森・『感染症』19以下。また、『それから』五の五（74）にいう藤野の遠縁の男は学生でありながら徴兵検査の対象であるから、官立学校生ではなからう。

50 4年の廃藩置県により武蔵国江戸を主たる地域として東京府が設置され、22年に中心部に15区からなる東京市が置かれる。その後の急速な都市化により1932年に周辺部に20区を設け（いわゆる「大東京市」）、1943年に東京府と東京市を統合して東京都が発足。1947年に35区を最終的に23区に再編。漱石作品の主たる舞台は15区。前註1・木庭・『「それから」』193注30は、漱石作品における東京の地理ないし地形の重要性を指摘する。『新版全集』は、全巻予約者への特典として「実用東京地図」（44年5月）に漱石作品の関連箇所を落とし込んだ半量ほどの「漱石文学地図」（初出は『漱石文学作品集』1990の附録）を提供した。中島国彦『漱石の地図帳——歩く・見る・読む』大修館・2018・117掲記の「坂と台地からみた東京地図」などを参照。

51 五十音順の人名の掲出は、本名・号を問わず本文初出の名称による。年代表記は、漱石存命中は元号のそれにより、前後は西暦による。巻22～24の注解を尊重しながらも、それを補正する。「新聞」や「雑誌」についての注記ならびに各種アーカイブのリンク先の掲出は、紙幅の制約から割愛する。

芥川龍之介（M25-1927）：T5年東大英文科卒。在学中のT5年2月に久米正雄・菊池寛・松岡譲・成瀬正一と共に同人誌『新思潮』（第四次）を創刊。同誌の『鼻』を漱石が絶賛（T5年2月19日付け芥川宛。『書簡』299）。同人と共に最晩年の木曜会に参加。

阿部次郎（M16-1959）：40年東大哲学科卒。ケーベル、大塚保治らに学ぶ。漱石が東京朝日に新設した「文芸欄」を担当。『三太郎の日記』（T3年。PPW82以下）は学生の必読書とされ、いわゆる大正教養主義（⇒前註34）を主導。T12年に東北大学美学教授。

安倍能成（M16-1927）：松山中学・一高を経てケーベルらに学び42年東大哲学科卒。漱石と連れだってケーベルを訪問した（「ケーベル先生と夏目先生その他」（1928。『追想』137-140）。大学講師・法政大学教授・京城帝国大学教授を経

てS5年に一高校長。戦後は貴族院議員や文部大臣や学習院院長などを歴任。修善寺大患で野村伝四と共に徹夜で看病に当る。前註48・大野・187に曰く、「安倍先生はこんなことをいわれた。『僕のアベは安倍と書くんだ。僕の名前は安倍能成と覚えるといいんだ。漱石先生が修善寺で大吐血をなさったとき、一番最初にかけつけたのが僕なんだ。『アンバイヨクナルが来たから、これは治るよ』という話になったんだ』」。

池田菊苗 (1864-1936): 京都出身。22年東大化学科卒。大学院を経て24年に東京高師の化学教授、29年に理科大学助教授、32年からライプチヒに留学。帰国後に教授。「味の素」の発明で知られる。漱石とは牛込の自宅が近所で留学前から接触があったとされる。

池辺三山 (1864-M45)。本名・吉太郎: 熊本市出身。父は西南戦争で西郷軍に加わり刑死。慶應義塾を中退後、23年に新聞「日本」の客員記者となり25年からフランスに留学。28年に帰国して大阪朝日主筆(編集局長の上司)。31年から東京朝日主筆。二葉亭や漱石の入社を主導。その批評眼の確かさにつき巻⑩-491。社内対立(⇒下)により44年9月30日に引責退社し翌年2月28日15時に逝去。23時に枕辺に駆けつけた漱石は翌1日の東京朝日(大阪は2日)に「三山居士」(巻⑩-497-500。⇒後註124)を掲載。漱石は西郷隆盛を想わせる三山の体格と人間的気風に惹かれて朝日入社を決断した(⇒後註118)。東京朝日で部下として校正を担当していた石川啄木(M19-45)の『一握の砂』(43年)に、「大いなる彼の身体が憎かりきその前にゆきて物を言ふ時」。

上田敏 (M7-T5。号・柳村): 小泉八雲に学び30年東大英文科卒。漱石とともに36年東大講師。38年の訳詩集『海潮音』が好評を博し帰朝後の41年に京大教授。「上田敏君の説によると俳味とか滑稽とかいうものは消極的で亡国の音だそうだが、敏君だけあってうまい事をいったよ」(『猫』六(38年10月。238))。(漱石に先立つこと5ヶ月ほどの)T5年7月9日に帰省中の東京で急逝。13日の葬儀に参列した漱石の15日付け厨川白村宛に曰く、「上田敏君が死にました。……人間は何時死ぬか分かりません。人から死ぬ死ぬと思はれてゐる私はまだびくびくしてゐます」(巻②-544)。

太田達人 (1866-1945): 盛岡出身。16年に成立学舎で漱石と同期。17年予備門入学。東大物理学科を卒業後、各地の中学校長。『硝子戸』九に曰く、「〔予備門に居た〕時分から余り多くの朋友を持たなかった私には、自然〇と往来を繁くするような傾向があった。私は大抵一週間に一度位の割合で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町に下宿してゐる彼を誘つて、大川の水泳場〔隅田川両国河岸に設けられた東大と予備門の水泳場〕迄行つた」。

大塚保治 (M元-1931。旧姓・小屋): 24年東大哲学科卒。29年から欧州留学。帰国した33年に初代の東大美学教授。『猫』の述亭君のモデルとされるが漱石は否定する(38年1月1日付け、巻②-344)。妻大塚楠緒子(M8-43。漱石による表記と訓は楠緒)は歌人。修善寺大患ののち帰京して入院中の漱石は、11月9日

の彼女の病没を13日に新聞で知り、「あるほどの 菊^{きく}抛^なげ入れよ 棺^{かん}の中」を手向ける〔『俳句』175、巻②-249、『思ひ出す事など』七、『硝子戸』二十五で表記が異なる〕。11月14日付けで東京朝日などに掲載された（大塚楠緒子死亡広告）に夏目金之助として狩野亨吉ら六名と名を連ねる（巻②-301）。

岡倉由三郎（M元-1936）：天心（1863-1913）の弟。23年東大英文科選科修了。漱石に一年半ほど遅れて官費留学でロンドンに渡り漱石を訪ねる。帰国後、東京高師教授。

奥太一郎（M3-1928）：21年同志社学院英語普通科卒。教員生活を経て26年に東大哲学科に入学してケーベルらに学び、29年岡山県津山尋常中学校。漱石の推挽で31年に五高。

狩野亨吉（1865-1942）：秋田郡大館町（現・大館市）出身。17年大学予備門卒、21年東大数学科卒、24年哲学科卒。24年に大学院に進学し翌年に四高に赴任したのち、人間関係ゆえに27年3月に退職。東京での浪人生活を経て、29年に漱石の推挽により五高教頭、31年に一高校長、39年に京都大学文科大学学長、翌年退職。岩波版漱石全集の背文字を揮毫。40年3月23日付け野上豊一郎宛に曰く、「京都には狩野といふ友人有之候。あれは学長なれども学長や教授や博士などよりも種類の違ふたエライ人に候」（『書簡』194）。〔筆者：（狩野と同郷の）安藤昌益（1703-62）とその著作（『自然真営道』、『統道真伝』）を発掘した狩野に注目するカナダの外交官ノーマン（Edgerton Herbert Norman：1909-57）につき、大窪愿二訳『忘れられた思想家——安藤昌益のこと』（岩波新書・1950、上・下）、『ハーバート・ノーマン全集』第三卷（岩波書店・1977）を参照。マッカーシズムで自死に追い込まれた彼につき、『思想』634号（1977年4月号）「特集 ハーバート・ノーマン——死後二十年——」〕

厨川白村（M13-1923。本名・辰夫）：東大英文科で小泉と漱石に学び、37年卒業後に五高・三高を経てT2年京大講師、上田敏の後継。漱石のもとで「恋愛観」を研究テーマにし、『虞美人草』の小野のモデル。T4年に感染症で左足切断。『近代の恋愛観』（T11。角川文庫・1950）で一世を風靡。避暑で訪れた鎌倉の別荘でT12年9月の関東大震災の津波に逃げ遅れて死亡。

呉秀三（1865-1932）：精神医学の草分けで東大医科大学教授。長男が西洋古典学の茂一（⇒③-546の註130）。漱石との接点は、帰国する池田菊苗と呉らを見送ったことのようにある（『日記』75）。漱石の症状に呉が下した診断につき、後註87。

クレイグ（1843-M39。William James Craig）：アイルランド出身の代表的なシェイクスピア学者。漱石は33年11月22日から翌年8月頃までクレイグの私宅で毎週火曜日に1時間5シリングでシェイクスピアの個人授業を受ける（『日記』24）。『永日小品』の「クレイグ先生上、中、下」（42年。巻⑫-208-217）がある。

ケーベル（1848-1923。Raphael von Koeber）：ロシア生まれでドイツ人の哲学者。26年からT3年まで東大哲学科教授で哲学・美学・西洋古典学を講じた。講義に連なり私淑した漱石は追憶三篇を朝日に掲載。『ケーベル先生』（44年7月。『思

い出す事など 他七篇』岩波文庫・1986・127-132)、T3年8月12日の帰国についての「ケーベル先生の告別」(東京朝日8月12日。同・134-137)、(第一次)世界大戦(T3.7.28~T7.11.11)による横浜のロシア総領事官邸での足止めについての「戦争から来た行違ひ」(東京朝日8月13日。同・138)。大戦とロシア革命に禍されて帰国を果たせず官邸で病没。

小泉八雲(1850-M37。Lafcadio Hearn): アイルランド系でギリシャ生まれ。23年に合衆国の出版社通信員として来日するも、トラブルから社との契約を破棄。知人の紹介で同年松江中学に英語教師として赴任し24年に松江の士族の娘小泉節子(M元-1932)と結婚。同年第五高等学校。27年の学制改革で第五高等学校に改組されたのを機に辞職し「神戸クロニクル」紙の記者。29年に帰化して「小泉八雲」を名乗り、同年東大教授。東大退職の翌37年に『怪談』を発表して急逝。『猫』六(224)の迷亭君曰く、「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜い事に先生は永眠された」。日本最良の小泉に対する評価は、論者のスタンスによって多様に分岐している。

小宮豊隆(M17-1966): 五高を経て41年東大独文科卒の木曜会メンバー。留学などを経てT14年に東北大学教授。『三四郎』(41年9月)の福岡県京都郡(現・みやこ町)を郷里とする三四郎のモデル。漱石は素行芳しからざる小宮を受け入れる(巻②3-411)。小宮の叔父犬塚武夫(M3-?)は、東京高商卒業後に大蔵省と大阪鴻池銀行を経てロンドンに留学し漱石と同じ下宿。帰朝後に第一銀行に勤務した。漱石は小宮を介して犬塚に株による資金運用を任せた(前註4・山本『家計簿』73。朝日新聞2016年5月18日朝刊「漱石 遺産の大半は『株』」によれば、漱石逝去当時の保有株式の時価総額は現在の約4600万円)。

斎藤阿具(M元-1942): 26年東大史学科卒。第一高等学校いらい大学院まで漱石と同級。二高教授を経て一高教授。参照:「夏目君と僕と僕の家」(1919。別-28-40)。

坂元雪鳥(M12-1938。旧姓・白仁、本名・三郎)。五高時代に寺田寅彦らと俳句結社紫溟吟社に参加し、東大国文科を卒業して40年7月に朝日に入社。兄は、『満韓ところどころ』二十一の関東都督府民政長官白仁武(1863-1941)。巻⑫-691以下の注解は、関東都督府を関東庁(T8年設置)とする点で誤り。

釈宗演(1859-1919。俗名・一瀬常次郎): 11年から臨済宗円覚寺派総本山の円覚寺で修業し18年に慶應義塾に進学した後、セイロンで修行(20-22年)。再び円覚寺で修行し25年に円覚寺派管長。38年から東慶寺の住職。漱石は宗演の満州巡錫(講演旅行)という中村是公の企画を仲介し、中村らとT元年9月11日に東慶寺を訪れて応諾の礼を述べ、27年の参禅いらいの再会の模様を「初秋の一日」(T元。巻⑫-507-510)に写す。「私に宗旨はありませんが(⇒後註98)、私に好意をもってくれる偉い坊さんの読経が一番ありがたい」(『書簡』287)と記した漱石の葬儀で導師を勤め戒名「文献院古道漱石居士」を授ける。宗演「禅の境地(上)」(掲載は1929。『全集月報』138)。

^{すが}**菅虎雄** (1864-1943): 24年東大卒の日本初のドイツ文学士で五高教授。大学時代からの漱石の友人で、漱石を五高に招聘。30年4月16日付け子規宛書簡(『往復書簡』262)にいう久留米での登山に同行。31年9月から一高。漱石の墓碑銘を揮毫。

鈴木三重吉 (M15-1936): 34年に三高から東大英文科に進むが、38年から神経衰弱で休学(⇒後註86)。療養中に得た題材による『千鳥』を、漱石は39年4月11日付け三重吉宛で「かう云ふ風にかいたものは普通の小説家には到底望めない。甚だ面白い」と評し、『ホトトギ』掲載で作家デビュー(巻22-489)。41年卒業。中学校教員を経て1916年に童話作家に転じて1918年に『赤い鳥』を創刊。T5年7月に逝った漱石旧知の三重吉夫人の告別式での漱石の様子につき、前註20・中村・250。

高浜虚子 (M7-1959。本名・清): 松山出身で子規に俳句を師事し、三高から二高に転学したが中退。放浪の末31年に東京に移り子規の協力で雑誌『ホトトギス』の主宰者となり『猫』を世に出す(前註13・高浜・『回想』142以下、同『猫』の頃(1927。『追想』11-16))。『猫』六(237)の寒月君は虚子を大いに茶化す。**滝田櫻陰** (M15-1926。本名・哲太郎): 36年に東大英文科に進み法科に転じるも、『中央公論』での翻訳アルバイトを経て37年に編集者となり42年に大学中退。名編集長として『新潮』の中村武羅夫と並び称される。漱石の『文学評論』(42年。巻⑮)の原稿清書を手伝ったことで木曜会の常連となる。

竹越與三郎 (1865-1950。号・三又): 14年慶應義塾入学。福澤の勧めで16年に時事新報社に入るも翌年退社。22年に民友社に入り『国民新聞』の政治評論を担当しながら、『新日本史』(24年。岩波文庫・上、下・2005)などで在野史家と称される。西園寺公望(1849-1940)の側近となり35年から衆議院議員5期。39年に読売新聞社主筆。

龍口了信 (1867-1943): 広島浄土真宗本願寺派末寺に生まれ、27年東大国史学科卒。広島県立中学などに勤務。西本願寺が18年に京都に開設した「普通教校」を34年に東京高輪に移転し、仏教との関係から離して39年に開校した「高輪中学」(現・男子のみの高輪中学高等学校)の校長に就任。『心』の「K」のモデルの一部とされる。

津田青楓 (M13-1978。本名・亀治): 京都の華道家元西川家の次男で漱石に油絵を教えた。家元を継いだ兄・西川一葉亭とともに漱石との親交厚く、『道草』『明暗』の装丁を手掛ける。漱石没後、河上肇(M12-1946)の『貧乏物語』(T6)に感化されてプロレタリア運動に参加。『漱石と十弟子』(初出・1949。芸艸堂・1974)がある。

坪内逍遙 (1859-1935。本名・雄三): 16年に東大文学部卒業と同時に前年創設の東京専門学校の講師。20年に二葉亭四迷を『浮雲』で世に送る。23年設置の文学科の看板講師。42年から二十年かけてシェイクスピアを全訳。44年5月の翻訳・演出坪内によるシェイクスピア公演を観劇した漱石は、22日の日記に「坪

内さんがあんなに沙翁にはまり込まないうちに、注意して翻へさせるとよかった」と記す(巻⑩-293)。さらに、「坪内博士にも登場の諸君にも面と向つては云ひ悪い所が大分あるので、少なくとも公演中とは差控えてゐた」と前置きして「坪内博士と『ハムレット』」を東京朝日の6月の文芸欄に掲載して(巻⑩-381-386)、翻訳者と演出家との差異に対する逍遙の理解不足を指摘する。

寺田寅彦(M11-1935。筆名・吉村冬彦、藪柑子): 29年五高に進学し翌年赴任した漱石に師事。31年に漱石を主宰者とする俳句結社紫溟吟社に参加。36年東大物理学科卒、東大理科大学教授。『猫』の水島寒月、『三四郎』の野々宮宗助のモデル。木曜会を避けて自由に山房に出入りし、漱石と連れだって美術展や演奏会に出掛けた。42年からの留学に際して漱石は妻に餞別の品(鰻の缶詰、茶、海苔など)を持参させる(巻⑩-11)。

土井晩翠(M4-1952。本名・土井林吉): 30年に英文科を卒業し33年に赴任した母校二高の教授を翌年には遊学のために辞す。34年8月に漱石を訪ね9月9日から十日ばかり漱石の下宿に起居。漢詩風の詩で一世を風靡し、「荒城の月」に瀧廉太郎(M12-36)が曲をつけた。参照:『晩翠詩抄』岩波文庫・1971。

戸川秋骨(M3-1939。本名・明三): 21年に第一高等中学校の受験に失敗して明治学院に編入。24年卒業後に同人誌に拠る文筆活動で樋口一葉(M5-29)とも交流。28年東大英文科選科入学、31年修了。山口高校(⇒後註63)を経て40年以降は東京のいくつかの大学で講師。木曜会の常連で、西片町からの漱石の引っ越し先探しを手伝う(⇒後註95)。後註69の『エイルキン物語』の訳者(1925)。

鳥居素川(1867-1928。本名・赫雄): 30年に大阪朝日入社。池辺三山の後をうけて主筆。漱石は東京朝日入社を決めたのち40年3月から関西に旅行し鳥居や社主の村山龍平(⇒後註10)と面談する。1918年8月の反政府集会について「白虹日を貫けり」という内乱の兆候を指す故事を引いた記事による筆禍で引責辞職(いわゆる白虹事件)。

中川芳太郎(M15-1939): 愛知県出身。39年東大英文科卒。42年から八高教授(ラテン語も担当)。『文学論』の「序」(⇒前注24)に曰く、「中川芳太郎氏に章節の区分目録の編纂その他一切の整理を委托す。中川氏はこの講義のある部分に出席したる上、博洽の学と篤実の質をかねたれば、余の知人中にて、かかる事を処理するにおいて尤も適当な人なり」(『文学論』上・23)。

中村古峽(M14-1952。本名・翁): 奈良県出身。40年東大英文科卒の漱石門下。同年東京朝日入社、43年退社。朝日連載の『殻』(T2)が好評を博すも、心理学に傾倒して東京医専(現・東京医科大学)に進みS3年に卒業して千葉市で精神病院を開業(現・中村古峽記念病院)。

中村武羅夫(M19-1949): 『新潮』の記者として41年から「作家訪問記」を同誌に連載して好評を博す。名編集長として『中央公論』の滝田樗陰と並び称される。

中村是公(1867-1927): 大学予備門以来の親友。その交友につき、『永日小品』の「変化」(巻⑩-205-208)。26年東大法律学科卒。大蔵省から29年に台湾総督

府に転じ、民政局長官の後藤新平（1857-1929）の知遇を得る。40年に営業を開始した南満州鉄道株式会社（⇒後註127）の初代総裁の後藤の推挽で40年に副総裁、41年に総裁。

野上豊一郎（M16-1950。号・白川）：大分県出身で一高と東大英文科で夏目の教えを受け、在学中の39年に同郷の弥生子（M18-1985。漱石の表記では八重子）と結婚。朝日の連載小説の企画・立案も担当していた漱石は豊一郎を介して短篇シリーズへの寄稿を弥生子に依頼し、『或夜の話』（T3）が掲載された。

野村伝四（M13-1948）：鹿児島県出身。36年一高卒。39年東大英文科卒。在学中から漱石と親密な子弟関係にあり、修善寺大患で肉親も面会謝絶となった折り、許されて安倍能成と共に徹夜で看病に当る。幾つかの中学校を経て、1928に奈良県立五條中学校長。

長谷川如是閑（M8-1969。本名・万次郎）：ジャーナリスト。42年3月からの朝日に連載した小説『?』が5月7日まで遷延。『それから』の連載開始が4月下旬から5月下旬となり8月14日に脱稿した漱石は、『?』の単行本版『額の男』の書評に取りかかって胃の激痛に襲われるも、9月2日からの満韓旅行前に書き上げた〔巻②0-31（4月28日）、65（8月3日）〕。9月5日の大阪朝日のみ掲載。「『額の男』を読む」巻①6-287-292〕。如是閑と慇意のジャーナリストを父にもつ丸山眞男（1914-96）は、「私にもやっぱり二人の先生がいた。どう考えても一人は南原（繁：M22-1974）先生、一人は如是閑」と語る。参照：「如是閑さんと父と私——丸山眞男先生を囲む座談会——」（初出・1985。『丸山眞男集』第十六卷・岩波書店・1996・125-218〔127〕）。PPW78。

藤代素人（M元-1927。本名・禎輔）：独文科時代から漱石と旧知。同じ船でベルリンに留学し、40年に京大教授。子規が藤代のドイツ語力と比して漱石の英語力を嗤った話につき、巻①6-34、前註26・子規・『墨汁一滴』128。

二葉亭四迷（1864-M42。本名・長谷川辰之助）：14年に東京外国語学校露語科に入学するも、東京商業学校（現・一橋大学）への統合を機に校長と対立して19年に退学し、坪内逍遙の知遇を得て、坪内雄三の名で『浮雲』（第一篇。20年）を発表。号の由来は、小説などを書く軟弱者を難じる父の江戸弁「くたばってしめえ」。28年からのロシア語の教職を経て、37年に大阪朝日の東京出張員となるも、池辺三山の計らいで東京朝日に月給百円で小説執筆要員として移籍。漱石は40年4月の朝日入社を機に言葉を交わすが互いの行き来はない。ロシア特派員として41年7月にペテルスブルクに赴任し病を得て翌年4月3日に帰国の途に就くも、5月10日にベンガル湾上の船内で死亡。漱石は、5月19日付けの坪内逍遙からの二葉亭追悼文集への寄稿依頼に、24日付けで「交際極めて浅く前後僅かに三四回程面談其うち差向にて対座せるは単に一回に候。いたづらに杜撰の文字を弄して故人を傷けもしくは自己を詐るも何となく不愉快に御座候」と辞退（巻②3-271）。6月2日の葬儀に参列した折りに切望されて「長谷川君と余」を送る〔巻②0-39、45。巻①2-219-226。⇒後註94〕。

フローレンツ (1865-1939. Karl Adolf Florenz): ベルリン大学で留学中の井上哲次郎(⇒後注101)から日本語を学び22年から東大でドイツ文学とドイツ語などを講じる。32年に外国人初の文学博士。T3年に任期満了で帰国。

本多嘯月 (生没年不詳。本名・直次郎): 11年創業の春陽堂の文芸誌『新小説』の記者として漱石の知遇を得る一方、編者としても活躍。同誌が39年に『草枕』を掲載したのを機縁に、春陽堂が漱石の主な作品の出版を手掛ける(⇒前註10・矢口・『漱石全集』3)。

正岡子規 (1867-M35: 本名・常矩^{つねのり}): 漱石と同年の旧暦9月17日に現在の松山市に生まれ、四、五歳頃から^{のぼる}升と名乗り、漱石は「のぼさん」と呼ぶ。16年に松山中学を退学して上京し、翌年9月に大学予備門予科四級に入学して漱石と同級。21年に本科一部(文科)に進み漱石と接近。23年に大学哲学科に進むが翌年2月に国文科に転科し、25年7月の学年末試験に落第して退学を決意して12月に日本新聞社に入社し翌年3月末に退学。28年4月10日から日清戦争の従軍記者。帰りの船中で喀血し5月23日に神戸病院に入院。5月26日に知らせを受けた漱石が見舞い状(巻22-78-81)に添えた漢詩五首につき、『往復書簡』146-149、『漱石詩注』50-58を参照。8月27日から10月19日まで松山の漱石宅に居候したのち上京。結核性脊椎カリエスで闘病中に逝去(⇒後註84)。参照: 柴田宵曲(M30-1966)『評伝 正岡子規』(初出・1942。岩波文庫・1986)。

松根東洋城 (M11-1964。本名・豊次郎): 宇和島藩家老の孫。母は藩主伊達宗城の三女。築地生まれだが、伊予宇和島で育ち松山中学で漱石に英語と俳句を学ぶ。一高・東大を経て38年京大仏法科卒。39年宮内省入省後、41年から「国民新聞」の俳句選者。木曜会のメンバー。北白川宮の御用掛として修善寺に滞在する東洋城と俳句を愉しむために漱石はそこを保養地を選んで「大患」に陥る(『日記』147)。39年10月20日付け皆川正禧(⇒後註103)宛に曰く、「東洋城君なるものは頗る真面目な青年である。青年は真面目がいゝ(⇒後註61)。僕の様になると真面目になりたくてもとてなれない。真面目になりかける瞬間に世の中がぶち壊はしてくれる。難有くも、苦しくも、恐ろしくもない。世の中は泣くにはあまりに滑稽である。笑ふにはあまりに醜悪である」。

マードック (1856-1921. James Murdoch): スコットランド出身の日本研究家。オクスフォードで古典語などを学び、14年にオーストラリアに渡り22年に香港などで中国の労働階級を視察した帰りに寄った縁で22年来日して第一高等中学校(一高の前身)で英語講師。26年に南アメリカに渡るも再来日して、27年四高、33年七高を経て、T6年にシドニー大学日本学教授。44年に博士の学位を辞退した漱石に祝意を送り、これに応じて漱石は「博士問題とマードック先生と余」と「マードック先生の日本歴史」を朝日に掲載した(巻16-346-359。⇒下^下の12)。

森田草平 (M14-1949): 四高在学中に同棲が発覚して退学処分。一高を経て36年に東大英文科に入学してその女性と結婚。木曜会に参加し卒業後に教職などを

経て、良家の子女向け「閨秀文学講座」の講師となる。受講生の平塚明子（M19-1971。のちの平塚雷鳥）と41年3月21日に雪中の那須塩原で心中未遂。マスコミ取材を避けるべく、漱石が身元引受人となり26日から二週間ほど山房で匿う。塩原事件を題材とする『煤煙』を漱石の推挽で42年1月から5月まで朝日に連載。漱石は42年11月に東京朝日に「文芸欄」を設けて森田に担当させ、第1回に『『煤煙』の序』を掲載（巻⑩-295-298。漱石の『煤煙』評は、『それから』（六の一、二、77、79）、『書簡』209など）。『煤煙』の続編として44年4月から連載した『自叙伝』がもたらした社内対立の顛末については、下の12に譲る。参照：『夏目漱石』初出・1942-43。講談社学術文庫・1～3・1980。

森成麟造（M17-1955）：39年第二高等学校医学部卒。上京して長与胃腸病院の医員。修善寺大患の折、派遣されて漱石の治療看護に当る（『思ひ出す事』一以下）。翌年に郷里の新潟県高田市に戻って開業〔巻⑦の口絵に44年4月12日に漱石山房で開かれた送別会の集合写真〕。参照：同「漱石さんの思出（抄）」（1932。『追想』317-328）。義理固い漱石は生涯「命の恩人」として遇した。

山川信次郎（1867-?）：28年東大英文科卒。漱石の推挽で30年五高教授、狩野の推挽で32年一高教授。漱石との小天温泉・阿蘇山への旅行が『草枕』『二百十日』の素材。

米山保三郎（M2-30）：東大哲学科大学院在学中に腸チフスで夭折〔漱石の小説における腸チフスの扱いにつき、前註7・小森・『感染症』98以下、125以下〕。巻⑤の口絵に25年2月撮影の漱石とのツーショット写真（口髭なし）。30年6月8日付け斎藤阿具宛に曰く、「〔5月29日に逝った〕米山の不幸返す返す気の毒の至に候文科の一英才を失ひ候痛恨の極に御座候同人如きは文科大学あつてより文科大学閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候」（巻②-127）。『猫』三、六（85、242）に登場する「天然居士」は、釋宗演の師の円覚寺管長今北洪川（1816-M25）が授けた米山の号。

渡辺春溪（M12-1958。本名・伝右衛門）：横浜の有力生糸商人らが15年に設立した横浜商法学校（21年に横浜商業学校に改称）を31年に卒業して同期の渡辺太良と実務研修と経済視察のために34年に渡英。帰国後、台湾で製茶業を興し漱石に台湾茶（紅茶の一種）を送る（T3年3月4日付け書簡、巻②-274）。

渡辺太良（M11-1922。本名・和太郎）：横浜の海産物商渡辺福三郎の長男。ロンドンの漱石は渡辺の斡旋で五番目の下宿を彼と共にする。父が45年に設立した横浜渡辺銀行の副頭取。『猫』の献本の礼に「するめ」を送った渡辺への38年10月14日付けに曰く、「僕は猫君はするめ各商買道具で贈答をするのは一寸面白い訳ですな」（巻②-415）。

和辻哲郎（M22-1960）：39年一高入学の翌年に読んだ『倫敦塔』（38年。巻②-1-29）についての感激を、東大哲学科から大学院に進んだT2年に手紙に認め漱石に送り面談を果たす。坂部恵編『和辻哲郎随筆集』岩波文庫・1995が、「夏目先生の追憶」（1917）、前註13・「漱石の人物」を収める（132-151、152-171）。